

33. 《利根川東遷、荒川西遷の、新たな謎解き1

～赤堀川は、あえて通水されなかった?!～》

利根川東遷とは、東京湾に注いでいた利根川を、太平洋側の銚子に流れるようにしたことをいい、荒川西遷は、その対語で、荒川の流れが西側に付け替えられたことをいいます。この両事業（注1）は、目的に諸説（注2）があり、ミステリーとロマンに満ちています。

本格的な事業は、27歳で関東郡代になった伊奈忠治（注3）の、35年間に及ぶ在任期間中に遂行されました。

まず、集中的に工事が行われた時期は、1620年代です。1621年に、利根川中流が直線化され（新川通開削）、同時に銚子方向へ流れる常陸川と結ぶため台地の開削（赤堀川）が試みられます。このとき忠治は、30歳弱。まだ幕府を動かす實力はありません。

関東郡代を指揮監督できるのは老中たちです。当時の實力老中は、印旛沼がある佐倉藩主の土井利勝（注4）。赤堀川を開削すれば、武蔵国低湿地（埼玉県）は水害リスクが減りますが、佐倉藩（千葉県内）は高まります。なぜ自領に不利な工事を認可したのかという不可解さが残ります。

そこで、“徳川家康は、江戸を中心に二極構造（注5）の関東を統治するため、緩衝地帯武蔵国の實力（低湿地の農業生産）をアップするとともに、二極の物流（水運）を支配しなければならないと、幕臣たちに遺言していた。”と仮説を立てます。

家康の側近だった利勝は、“家康の遺言に従い、忠治が申し出た新川通・赤堀川開削は認めるが、利根川の水を赤堀川に通水させることは認めなかった”と考えれば、不可解さはなくなります。なお、赤堀川に通水されるのは約30年後のことで、利勝死去後、武蔵国が発展した段階でした。

この仮説は、1629年に行われた荒川西遷（荒川本流が支川入間川を流れるよう付け替え）にも該当します。この工事は、当時の老中を輩出していた川越藩ばかりか江戸も、荒川の洪水による水害リスクを高めますので不可解です。しかし、武蔵国の開拓が進むとともに、荒川上流域から江戸への物流距離が短くなる

ことを考えれば、謎は解けます。

また同年、鬼怒川がショートカットされ常陸川上流部に合流するよう付け替えられますが、これも仮説に従えば、江戸への物流距離が大幅に短縮されますので、納得できます。

見方が変われば、解釈も様々に変わります。さらなる研究が待たれるところです。

注1：利根川東遷・荒川西遷事業など関係年表

- 1621 年（元和 7）：浅間川締め切り、新川通開削、赤堀川開削
- 1625 年（寛永 2）：新川通・赤堀川を 3 間拡張（赤堀川はまだ通水できず）
- 1629 年（寛永 6）：荒川の瀬替え（荒川の西遷）、鬼怒川付け替え
- 1631 年（寛永 8）：葛西井堀開削

注2：主な説として、以下があります。

- ①江戸を利根川の洪水から守る
- ②埼玉低湿地帯を開拓する
- ③水運網の確立
- ④伊達藩からの攻撃に備えた外堀

①については日本堤が機能していましたし、③について東北との水運網を掲げる説ありますが 1620 年代では時期尚早です。④の外堀説としては関東領国を分断するばかりか江戸城から離れすぎていて非現実的です。

なおこれら諸説のほかに、土木学会江戸開府 400 年記念展において、赤堀川の開削の目的が日光街道・中山道の整備だったとする見解が出されていますが、それが主目的とは考えられません。当時、幕府として両道の整備優先度は高くなかったと推察されるからです。

注3：伊奈忠治（生没年：1592—1653 年）

伊奈忠次の次男。関東郡代としては 3 代目。

注4：土井利勝（生没年：1573—1644 年）

注5：関東の二極とは、南西部（鎌倉や小田原を有する地域）と上野国・下野国（古河などと水運で繋がった地域）。江戸のある武蔵国は、両地域の緩衝地域でした。

写真：①利根川東遷における1620年代の工事

(http://homepage2.nifty.com/yamakatsu/keiido_tonegawa.html の図に細見が赤で示す)、

②新川通、赤堀川の詳細図

①



②

